

紀元前 2 千年紀エジプトの葬制の変遷を探る

—ダハシュール北遺跡第 27 次調査(2020)—

矢澤 健 東日本国際大学エジプト考古学研究所客員教授
吉村 作治 東日本国際大学学長・教授

Investigating the Transition of Egyptian Burial Practices in the Second Millennium B.C.: The 27th Season of Dahshur North Project, 2020

YAZAWA, Ken Visiting Professor, Institute of Egyptian Archaeology, Higashi Nippon International University
YOSHIMURA, Sakuji President/Professor, Higashi Nippon International University

1. はじめに

古代エジプトの紀元前 2 千年紀に相当する中王国時代(紀元前 21～前 17 世紀)と新王国時代(紀元前 16～前 11 世紀)では、葬制の様々な側面で違いが見られ、この変化は古代エジプト文明史の重要な転換であった可能性がある。発表者は紀元前 2 千年紀における葬制の変化の特質とその背景を明らかにする目的で、ダハシュール北遺跡を対象に調査・研究を実施してきた。同遺跡は両時代の墓が混在しており、過去の調査結果から発掘地点によって墓の時期や特徴に違いが見られることが指摘された。そのため 2015 年以降は遺跡全体の年代幅や階層差、埋葬習慣の変遷過程を把握するために、広く調査区を分散して発掘が進められている。

2020 年 2～3 月に行われた第 27 次調査では、本遺跡の西端と北東端の 2 つの調査区で発掘が実施された(図 1)。以下では調査区に分けてそれぞれの成果の概要を報告する。

2. 遺跡西端調査区

西端調査区では、新王国時代ラムセス朝期のシャフト 47 周辺に焦点が当てられた。シャフト 47 は 2005 年度の第 11 次調査で地下の発掘が行われており、地上部には地上施設の基礎と推測された盛土がシャフト開口部を囲むように残存していた。過去に、近隣のトゥーム・チャペル(シャフト 40)に属する基礎部の下から中王国時代の墓が未盗掘で複数発見されたことから、シャフト 47 の盛土の下にも前時代の遺構が隠されている可能性があった。第 27 次調査では盛土の発掘を実施して遺構としての性格を調べるとともに、

前時代の遺構の有無を確認した。

盛土の発掘の結果、シャフト 47 の西側から日乾レンガを半円弧状に配した遺構が発見された(図 2)。レンガ列の範囲は南北 7.0 m、円弧の半径が 3.5 m で、細砂の上に粗く積まれており、レンガの約 3 分の 2 は円弧の接線に対して長手方向が平行する形で並べられていたが、3 分の 1、特に北側部分は短手方向が平行するように並べられていた。南側の一部はレンガ列が失われており、その下からシャフトの開口部が発見された(シャフト 169)。レンガ列の円弧の中心がシャフト 47 開口部長軸の延長上に位置していることから、半円弧状日乾レンガ列はシャフト 47 に付随する施設だった蓋然性は高い。

シャフト 169 は開口部が南北 2.2 m、東西 1.0 m で、シャフトの深さは 4.0 m、底部から南側に平面矩形の埋葬室(南北 2.3 m、東西 1.0 m、天井高 1.0 m)が掘削されていた。埋葬室は盗掘を受けており、中王国時代に年代づけられるほぼ完形の球胴壺形土器、丸底鉢形土器以外に埋葬に関連する目立った遺物は見られなかった。シャフト 47 の南からも南北 2.4 m、東西 1.2 m の矩形のシャフト開口部が発見された(シャフト 170)。深さはわずか 0.6 m で墓として使用された痕跡は認められず、未完成の墓と考えられる。

3. 遺跡北東端調査区

遺跡北東端では 162.5 m² の範囲で表土の発掘が行われ、10 基のシャフト墓開口部が発見された(シャフト 171～180、図 1 右下)。第 27 次調査ではこの内 5 基(シャフト 172～176)の発掘調査を実施した。北東端調査区では、シャフト 172 と 173、シャフト 175 と

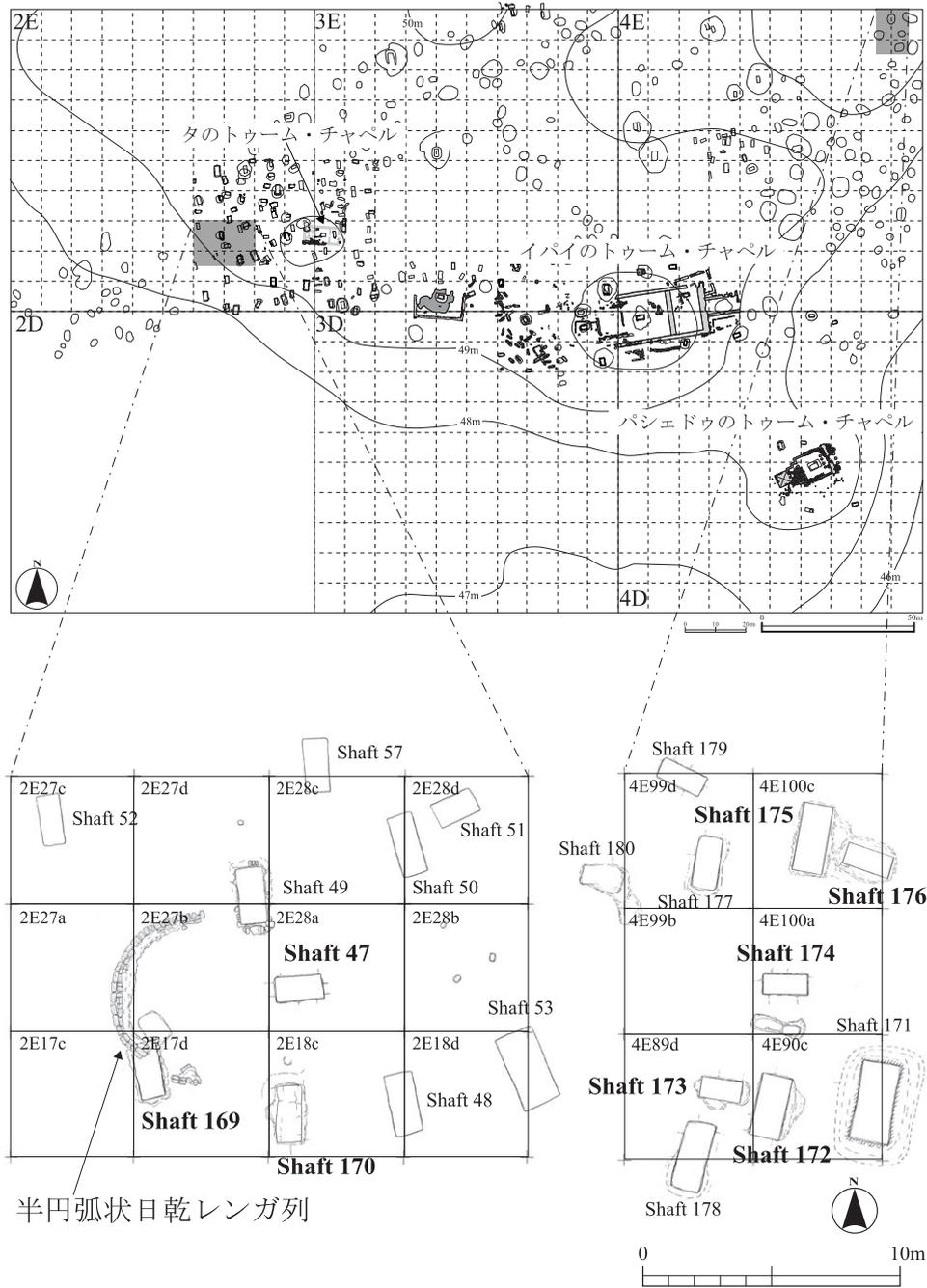


図1 ダハシュール北遺跡全体と第27次調査区



図2 半円弧状日乾レンガ列(西から東を望む)

176のように、開口部が南北に長いシャフト墓と東西に長いシャフト墓が極めて近接した組み合わせが認められた。

シャフト172と173は近接していただけでなく、地下で繋がっていた(図3)。シャフト172は開口部が南北2.6m、東西1.3mで深さは7.2m、南側に矩形の埋葬室(奥行3.0m、幅1.9m、天井高1.5m)が設けられており、シャフトの形状から中王国時代の墓と考えられる。一方シャフト173は開口部が南北0.9m、東西1.6mで深さは6.6m、西側に矩形の埋葬室(奥行2.7m、幅2.1m、天井高1.0m)が設けられており、

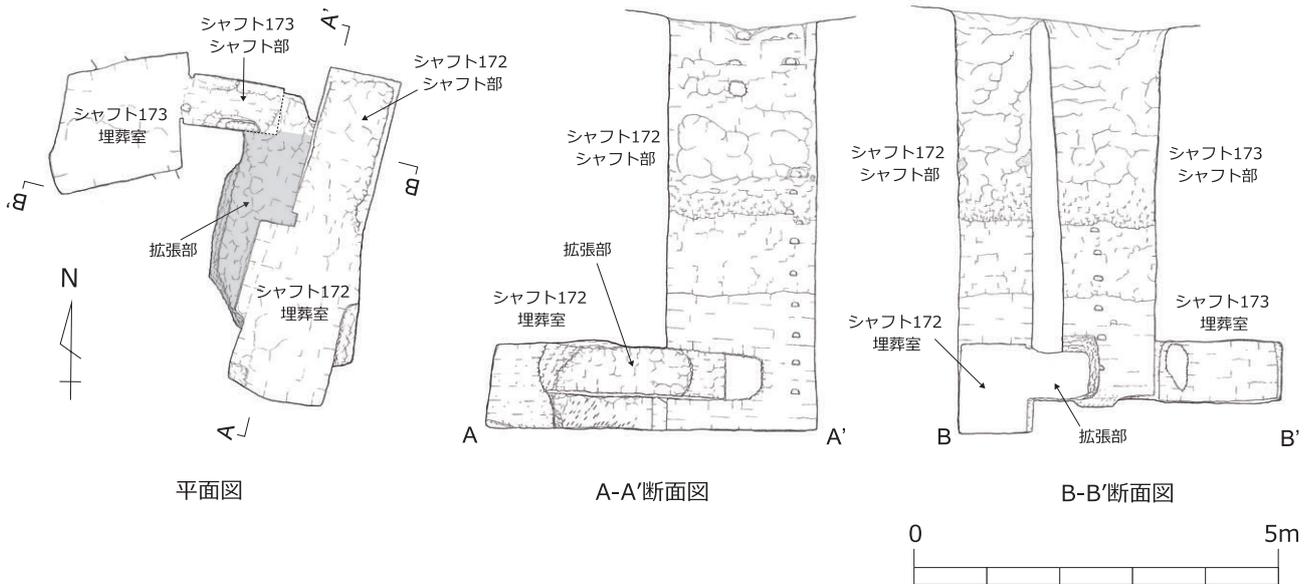


図3 シャフト172・173平面図・断面図

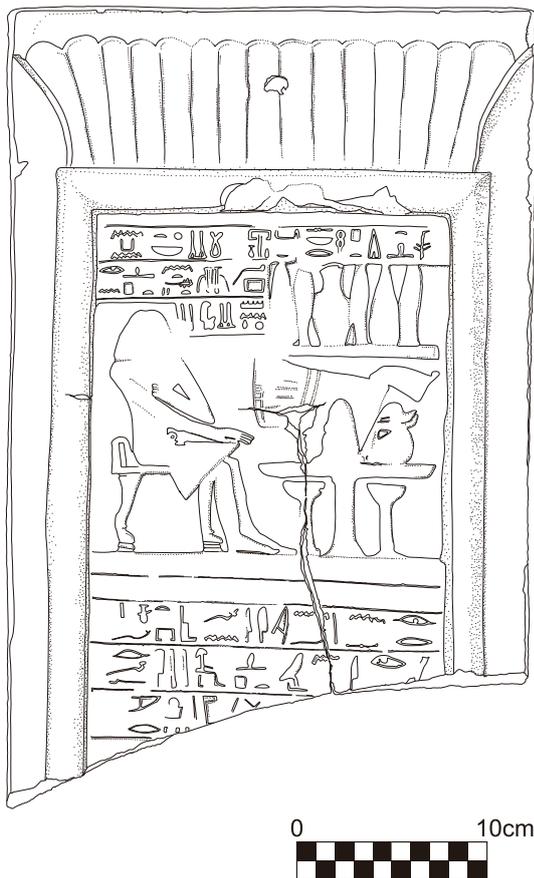


図4 シャフト172出土石灰岩製ステラ

シャフトの形状から新王国時代の墓と推測される。従ってシャフト172がまず完成され、その後173が掘削されたという順序が想定される。シャフト173の製作者は東側に部屋の掘削を試みた形跡があるが、シャフト172のシャフト部に繋がったため断念し、方向を

変えてシャフト172埋葬室の西側を拡張したように見受けられる。シャフト172西側拡張部の床面レベルは173のシャフト床面と同じで、172の埋葬室床面より約0.6m高い。シャフト172埋葬室内部の堆積中には日乾レンガが粗く敷かれていた層があり、レンガ群の上面は拡張部の床とレベルが揃えられていたことから、このレベルで拡張部からレンガ敷きの床面にまたがる空間が確保され、部屋として再利用されていた可能性が高い。

再利用を裏付けるように、シャフト172と173の両方で中王国時代と新王国時代の遺物が混在していた。特筆すべき遺物として、シャフト172のシャフト部から出土した2点の石灰岩製ステラ片が挙げられる。内1点は矩形で軒蛇腹の装飾を持ち、玉縁の内部には椅子に腰掛けた被葬者の前に供物が捧げられた図像と、その上下に横方向の碑文が刻まれており(図4)、中王国時代に年代づけられる。碑文から被葬者は家令という称号を持つケンティケティヘテプという名前で、母の名はメンケトであることが分かる。但しステラは本来地上に設置されたものであり、周囲には中王国時代のシャフト墓が数多くあるため偶然このシャフトに崩落した可能性は捨てきれず、ステラがシャフト172の被葬者に属するという確証はない。また、中王国時代の大型丸底壺形土器が発見されており、ほぼ完形に復元された(図5-1)。特徴的な頸部の形状から、この土器は第13王朝前半に年代づけられる。その他木製、陶製のシャブティが発見されており、これらはラムセス朝期の副葬品と考えられる(図5-2、3)。



1. 大型丸底壺形土器
図5 シャフト172 出土土器、シャブティ

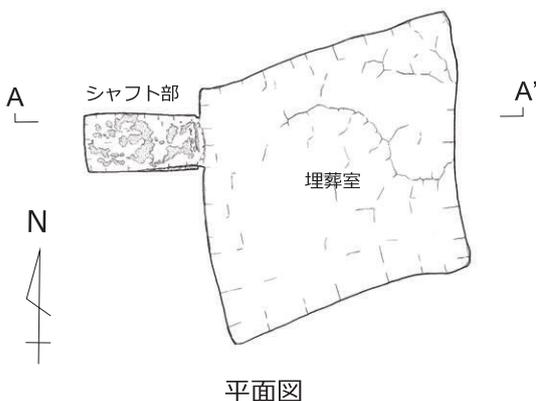
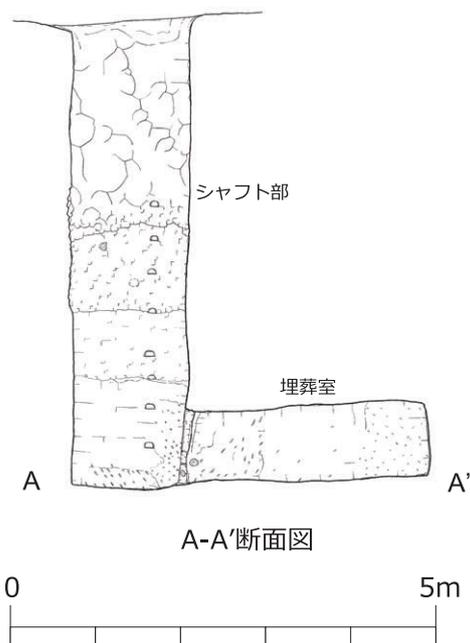


図6 シャフト174 平面図・断面図



シャフト175と176について本稿での詳述は避けるが、同様に極めて近接した位置関係にあり、前者が中王国時代、後者が新王国時代に掘削された墓であることが判明した。但し両者の間には径30cm前後の穴が2つ貫通している程度で、新王国時代の人々が中王国時代の墓を積極的に再利用しようとした形跡は認められなかった。

シャフト174は上記の2対のシャフト墓群とは異なり独立していた。開口部が南北0.9m、東西1.7mで深さは6.9m、東側に矩形の埋葬室(奥行3.8m、幅3.8m、天井高1.2m)が設けられていた(図6)。埋葬室は盗掘を受け攪乱されていたが、石製容器や輸入土器、彩文土器が比較的良好な状態で残存していた。

シャフト174出土の石製容器は器高または径が10cm前後の小型のもので、黒色の硬質の石材とエジプシャン・アラバスター(トラバーチン)製のものがあつた(図7-1~3)。この内1点は籠の残骸と一緒に発見されており、籠に入れられた状態で副葬されていた可能性がある。

出土土器の中にはベース・リング(Base Ring)と呼ばれるキプロス産の壺が含まれていた。低い脚台を持ち長頸で口縁部が漏斗状に開いており、把手が1つだけある形状で、外面にクリーム色のスリップが塗布されたもの(図7-4)と、全面黒色のもの(図7-5)の2種類があつた。もう1つは両凸レンズ状の胴部を持ち、口縁部が開いた円筒形の頸部と把手を持つ壺形土器で、



図7 シャフト174出土遺物

内面・外面共に黒色でクリーム色の交差する2本の線が胴部に描かれていた(図7-6)。その他、カーン・アンフォラと呼ばれるレヴァント地域からもたらされたアンフォラが少なくとも2個体分出土した。アンフォラの破片の一部はシャフト部の床に敷き詰められたように出土していたが、こうした出土状況に至った経緯は不明である。また、巡礼壺と把手付の広口壺が連結された土器が出土した(図7-7)。エジプト在地の土器では、焼成後に彩色が施された多色彩文のアンフォラが2個体出土した(図7-8、9)。これらの土器の年代は第18王朝中期から後期にかけてであり、ダハシュール北遺跡でこれまでに発見された新王国時代の墓の中では最も古い時期に位置付けられる。

4. おわりに

第27次調査の成果で特に際立っていたのは、遺跡北東端調査区での発見である。シャフト172と173、および175と176では、新王国時代の墓が中王国時代の墓に極度に近接しており、意図的な配置としか考えられない。前時代の遺構を再利用する意図があったか、あるいは墓が密集している地域に新たに墓を作る際、構造がシンプルで地下空間の位置が予測しやすい中王国時代の墓の近傍にわざと墓を築くことで、地下での接触を回避する狙いがあった可能性が考えられるが、今回の成果だけでは判別が難しい。今後調査区を広げ資料を追加していくことで検証していく必要がある。

シャフト 174 からはキプロス産、レヴァント地域産の土器や、多色彩文土器が発見され、第 18 王朝中期から後期に年代づけられる墓であることが分かった。新王国時代初期の墓の資料はメンフィス地域では珍しく、当時の葬制やテーベ地域・諸外国との関係を考察する上で重要な資料となる。遺跡北東端で出土した中王国時代の土器は第 13 王朝前半のものであり、この時期の墓もメンフィス地域では稀有である。既往のエジプト学研究の中で比較的研究が進んでいない時期・地域に光を当てる資料が得られたことは、今期調査の重要な成果と言える。

本研究は日本学術振興会新学術領域研究(研究領域提案型)計画研究「古代エジプトにおける都市の景観と構造」(研究代表者:近藤二郎、課題番号 18H05446)と基盤研究(C)「古代エジプト中王国時代末期の王朝

交替プロセスの解明」(研究代表者:矢澤健、課題番号 19K01098)の助成を受けて実施された。

■参考文献

- ・ Baba, M. and K. Yazawa 2015 Burial Assemblage of the Late Middle Kingdom shaft-tombs in Dahshur North. In W. Grajetzki and G. Miniaci (eds.), *The World of Middle Kingdom Egypt, Middle Kingdom Studies 1*, 1-24, London, Golden House Publications.
- ・ 矢澤健・吉村作治 2016 「エジプト・ダハシュール北遺跡の中王国時代のシャフト墓について:遺構の形状・規模・分布の分析」『オリエント』 58(2)号 196-210 頁。
- ・ 矢澤健・吉村作治 2020 「紀元前 2 千年紀エジプトの葬制の変遷を探る—ダハシュール北遺跡第 26 次調査(2019)—」『第 27 回西アジア発掘調査報告会報告集』 107-110 頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 吉村作治・矢澤健・近藤二郎・柏木裕之・山崎世理愛・石崎野々花・有村元春 2019 「エジプト ダハシュール北遺跡調査報告—第 25 次調査—」『エジプト学研究』 25 号 3-24 頁。